

編集後記

○「親鸞教学」が誕生してから、六カ月学内・学外の、多くの人々から寄せられる、期待と激励と批判との声のなからここに、第二号をおとどけする。

○ある読者から「ともかくも『親鸞教学』という名の雑誌が、世に出たことに意義がある」という、寛大な励ましという言葉をいただいたが、同窓の某先輩は「真宗学の教授ばかりでなく、谷大の全教授を網羅して、あらゆる角度から親鸞教学を究明してほしい」と要望され、更に、「仏教学や外典の学者も、親鸞に心を引かれ、真実の闡明に熱意をもつ人であるならば、すべてが、親鸞の学徒であるとみるべきではあるまいか」と、ご意見を寄せてくださった。

○それは、むしろ創行当初からの、われわれの願いであって、そのために、これが一学会の機関誌にとどまることなく、学内は勿論のこと、広く世に公開されることを企図したのであった。

○しかし、それに先立って「親鸞教学と

は何か」「いかなる態度で親鸞に学ぶのか」が明らかにされねばならない。それが、真宗学会に属するわれわれにとつての、まず何よりの課題である。そこで、「まず、われわれ自身がペンをとうろ」という申告せがなされたものであるが、更に鈴木大拙先生からいただいた玉稿によって、この機関誌が学会をこえて外に出る第一歩とすることができたのである。

○「親鸞教学」は、研究誌なのか、啓蒙誌なのかは、真宗学会の内部でも意見の一致しない現状である。これについて、一信者として、しかも親鸞の教えに造詣の深い某大学教授は「やはり学術雑誌であって、われら大衆には非常にむづかしい。その点、却って、曾我・金子両先生のものが、一番肯けもするし、ともかく解り易い」といい「この学術雑誌を、同時に、大衆性のあるものとするには、一八〇度でなく、三六〇度の根本的転換を必要とすると思う」と厳しいご批判を寄せられた。これが、大衆の声を代弁するものであるとするならば、真宗学会内における、研究か啓蒙かの論議は、何を意味するものであらうか。われわれは、深く自らを省みなければならぬ。

○「親鸞教学」は研究誌なのか、と問われれば、われわれは、研究誌だと答えよ

う。しかし、研究誌であるということは啓蒙性・大衆性をもたぬということではない。そこに、曾我量深先生によって命名され、金子大栄先生の呼応して立たれたところから出発した「親鸞教学」の独自性がなければならぬ。それが、清沢満之先生の指教する近代・現代教学としての真宗学である。したがって、われわれの課題は、この先学に導かれ、不断に親鸞教学を問うて、精進することのほかにない。

○鈴木先生の「わが真宗観」は、昨秋、大谷大学で行われた二日間にわたる特別講義の筆録に、先生の手を加えていただいたものである。『教行信証』の英訳を果された先生は、世界的視野に立って、親鸞の教学の、特に行と信について、所見の一端を述べてくださった。しかし先生独自の一法句の世界を筆録によって再現することは、まことに困難である。その点、先生並びに読者に寛恕を乞うほかはない。なお、第二日目は、次号に掲載する予定である。

○曾我先生の「絶対自由の根源」は「浄土真宗大綱」と題する、今年度の大学院における講義の聴記である。サブタイトルに「本願三心の背骨としての欲生心」とあるとおり、如来招喚の勅命としての欲生心こそ、本願の本願たる眼目であり

われら衆生に、絶対自由の心境を開顯する根源であるということを、適確に、しかも平易に述べられている。金子先生をして「これこそ純粹真宗学である」といわしめた、曾我先生の面目躍如たるものがある。

○金子先生は、席の温まる暇もない、ご多忙の中から「三宝帰一の課題」を明らかにする「釈尊と宗祖との間」と題する論文をお書きくださった。大乘仏教の仏説・非仏説が論議せられる昨今、「本願を信じ念仏申さば仏になる」という真宗こそ、仏教の歴史の根本となっているものであり、仏も法も念仏のほかにはなく僧もまた念仏する身となることのほかにはないと教示して、仏教徒の帰趣を明らかにしてくださった。

○「捷の倫理」は、稲葉先生が、多年、研究されている蓮如教学によりながら、宗教と倫理との問題を論じられたものである。

○多忙のため、久しく筆をとられることのなかった安田先生が、「親鸞教学」のために、書き下しの論文をお寄せくださった。先生が筆をおとりになるのは、昭和の初期「仏座」以来のことではなからうか。この論文が、本誌に掲載されるに至る事情を、ここに縷説することは差し控えるが、先生のお示しくくださった情熱と、ご苦労とが、身に沁みて有難い。

それは、やがて「親鸞教学」に対する、われわれの態度と責任とを身をもってお教えくださったものというほかはない。

「覚存禪」としての発遣と招喚」は、「覚存禪」という独自の概念をもって「発遣と招喚」が、自己喪失の実存を廻転して自己回復の実存となす願生心の内面と外面であり、如来の呼びかけこそ、自覚的存在の存在範疇であると明らかにせられたものである。

○いま、当初の企画どおり、第二号を発刊することのできた「親鸞教学」は、十一月一日には、第三号をおとどけできる予定である。

○たまたま、今年は、大谷大学の初代学長（当時学監）清沢満之先生の生誕百年にあたるため、別掲予告のとおり、第三号は、祝賀の記念号とする準備を進めている。従来ご執筆くださった諸先生のほかに、正親舍英名譽教授、西谷啓治教授の玉稿もいただける予定である。次号をご期待くださると共に、あわせて「親鸞教学」に対する諸先輩並びに諸兄の、愛情あるご叱正を心からお願ひする次第である。

○それらの批判や激励の声に導かれて、われわれは、われわれの力をここに結集し、輝かしい親鸞教学の伝統を自らの時代に明らかにするために、一步一步の歩

みをたしかめながら、この「親鸞教学」とともに、生長してゆきたいと念願している。（伊東）

昭和38年6月1日 印刷

昭和38年6月10日 発行

親鸞教学 第2号

京都市北区小山上総町22

大谷大学真宗学会
親鸞教学編集部

代表 稲葉秀賢

京都市東山区山科四富

印刷 一灯園印刷部

編集
発行

印刷